

「過去の負の歴史に向き合う」

2015年08月18日

「安倍首相の戦後70年談話」が出されたが、下記の言葉が最も気にかかる。「日本では、戦後生まれの世代が、今や、人口の八割を超えています。あの戦争には何ら関わらない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わされてはなりません。」この言葉は安倍首相の本音であろう。理解できなくもない。しかし、言葉では謝罪を表明しながら、実際において、謝罪に伴う具体的な言動をしてこなかった。むしろ、責任ある地位にある政治家たちは謝罪とは真逆な言動を表してきた。それが、アジア諸国からの批判、また、世界から歴史認識に関して疑義を生んで来たのではないか。

この件に関し、ドイツのR・V・ヴァイツゼッカー元大統領が1985年5月8日に行った「荒れ野の40年」という歴史的な講演で語っているので、引用したい。「今日われわれの国に住む圧倒的に大多数の者は、あの当時、まだ子供であったか、あるいはまだ生まれてもいなかったのであります。自分が犯してもいない犯罪についての自分の罪責を認めることはできません。こころある人々は、これらの人々に、ただドイツ人であるという理由で、悔い改めのしるしの粗衣を身に着けることを期待することはできません。しかし、父たちは、この人々にとっても困難な遺産を残してしまったのであります。罪責があろうがなかろうが、年を取っていようが若かろうが、われわれはすべてこの過去を引き受けなければなりません。(中略)この過去を清算することが大切なものではありません。それは、われわれには不可能であります。過去をあとから変更したり、なかったことにすることはできないのです。しかし、過去に対して目を閉じる者は、現在に対しても目を閉じるのであります。かつての非人間的な事柄を思い起こしたくないとする者は、新しく起こる罪の伝染力に負けてしまうものなのであります。」

岩波の月刊誌『世界』の9月号に、ドイツ在住の梶村太一郎氏が「ドイツ・負の歴史に終止符が打たれることはない」と題して寄稿している。敗戦70年を迎えた今年の記念式典で、ドイツ近現代史の大御所ハインリッヒ・アウグスト・ヴィンクラ教授は下記のように演説したという。「ドイツの過去に関する議論は終わっていないし、またこれからも終わりはない。矛盾にあふれた歴史を習得するには、特に暗い面に立ち向かう用意が必要だ。」(中略)「道徳的義務を忘れてすることへの正当性などはあり得ない。このことは数百万人の強制労働者の非人間的な扱いに関してもそうである。このような歴史には終止符が打たれることはない。」ベルリンの一等地の広大な敷地に「ユダヤ人追悼記念館」が建っている。見過ごされてきた旧ソ連の被害者のために「虐殺されたソ連邦戦争捕虜の追悼記念碑」の建設運動が市民の中から起こっていると報告し、梶村氏は「負の歴史は社会の記憶に刻まれるまで、決して終止符が打たれることはないのである」と結んでいる。

『世界』の同じ号で、フリーライターの中村真人氏の「過去への取り組みは、人を強くする」を掲載している。コール内閣の家庭大臣に就任したリタ・ジェスムートは下記のように語っている。「統一会派の高い地位にある政治家から、こんなことを言われた経験があります。『このような記念日はもういらぬ。ドイツ国民が弱々しくなってしまう』。私はこう答えました。『あなたはそう考えるかも知れないが、私の考えは逆だ。過去と向かい合うことによって国民は強くなるのです!』。」

過去の負の歴史にどう向き合うかによって、その国の良識と品位が表れる。日本は、罪責を込めた九条を堅持することによって、世界から認められるのではないか。